



低コスト造林の推進に向けた コンテナ苗の導入拡大

マルチキャビコンテナ苗

森林資源が人工林を中心に利用段階に入ってきている中で、主伐・再造林を本格的に進める上では地拵、植付、下刈などの育林経費の低減が不可欠かつ大きなテーマとなっています。

全国に先駆けて人工林資源が充実化している九州の国有林では、林業経営において大きなウエイトを占める育林段階のコスト削減を図るため、伐採・搬出と跡地の植栽を同時に発注する一貫作業システムを拡大するとともに、その実行に欠かせないコンテナ苗(※)の生産拡大・普及への支援に取り組んでいます。

コンテナ苗の特徴

コンテナ苗は、①時季を問わず植栽が可能、②植栽後の活着が良い、③これまでの普通苗の倍以上の植栽工程が可能などの特徴があります(現地の状況によって違いはあります)。

植栽後の成長については、導入初期に設定した試験地で4年目の経過観察を続けていますが、従来の裸苗と同等以上の状態で推移しています(図1)。

また、年間を通して出荷できることから苗木生産者にとっては余剰廃棄苗の回避ができるとともに、造林者にとっても労働量の平準化が図られるなどの利点があります。

これらの特徴を生かして、伐採搬出後すぐに植栽することにより木材生産と一貫した造林事業の実行が可能となり、苗木運搬の機械化や高性能機械の利用で枝条整理を行うことにより地拵の省力化が図られます(このような作

業方法を一貫作業システムと呼びます)。

さらに、成長の早い優良品種と組み合わせることにより、下刈回数や低減が期待され、育林経費の大幅なコストダウンにつながる可能性があります。

コンテナ苗の導入と一貫作業システムの実施状況

九州森林管理局では、コンテナ苗の導入に当たってはその特性を活かして伐採・造林の一貫作業が仕組める①複層伐(誘導伐)と植栽の一括契約予定箇所、②立木販売と植栽請負の混合契約予定箇所において使用することを基本としています。

事業実行に当たっては、まだコンテナ苗の生産量は限られていることからまず民有林での使用を優先しつつ、積極的に導入を進めた結果、平成22年度から26年度までの5年間で約87万本を

スギコンテナ苗試験地における成長量データ

【試験地：宮崎市の石坂国有林】

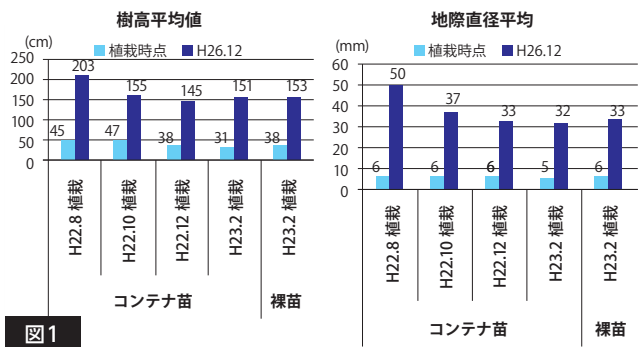


図1

九州におけるコンテナ苗出荷量の推移

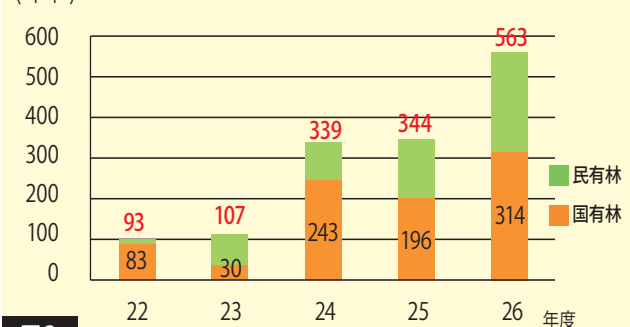


図2

注) マルチキャビコンテナ苗の数量を計上

植栽しました(図2)。一貫作業システムの実施面積も年々増加し、平成26年度は126ヘクタールの実績となっています。

今後、国有林においては、主伐・再造林の推進に伴って公益的機能に配慮した複層伐が増加し、コンテナ苗の需要の伸びが大きくなるとともに、民有林においても、導入促進に向けた支援制度が各県において措置されるなど需要の増大は確実に見込まれていることから、コンテナ苗の生産拡大と安定供給体制の整備が急務となっています。



フォワーダによるコンテナ苗木運搬

コンテナ苗の生産拡大・普及に向けて

昨年7月、コンテナ苗の生産拡大と安定供給、また育苗技術向上を目的に

「コンテナ苗供給調整会議及び生産技術向上検討会」を九州各県の樹苗生産組合、各県の林務担当者や研究機関、森林総合研究所など約80人の出席のもとに開催しました。

供給調整会議では、コンテナ苗の導入状況、26、27年度の各県苗連の供給計画に基づく調整と増産要請、九州国有林の向こう三年間の苗木需要見通しを情報提供しました。

生産技術向上検討会では生産者によるコンテナ苗生産技術の紹介、森林総合研究所九州支所からはコンテナ苗植栽試験地の報告、林木育種センター九州育種場からはエリートツリーの普及に向けた報告が行われ参加者の情報共有が図られました。

また、意見交換会では、需要増大に伴う穂木不足や採穂技術の継承等が課題であるとの意見が出されるなど活発な討論となりました。

九州森林管理局では、今後もこうした情報共有の場を設けることとしており、民有林への普及に向けた大きな一助になっているものと考えています。

まとめ

九州でのコンテナ苗生産も始まってから5年が経過し、各生産者が日々よりよい苗づくりを目指して技術の向上を図っています。ぜひよりも早く主

伐・再造林の本格時期を迎えようとしている九州においてコンテナ苗の普及は再造林のコスト削減に不可欠なツールといえます。

今後、年間を通した苗木の安定供給や育苗コスト削減による苗木の低価格化などの課題を解消していくため、コンテナ苗生産者や県行政、森林総合研究所等の研究機関、造林事業者等と連携しつつ、民有林へも一層のコンテナ苗の普及を積極的に進めながら、九州からの林業再生を目指していく考えです。



※コンテナ苗：

硬質樹脂製などの容器で育苗された苗木。コンテナ苗は、容器底面の開口や内部の突起等の工夫により、根の変形や根巻きが生じにくく、根切りも必要としない。また、培地ごと植栽するため、活着が良く植栽時期を選ばない。

コンテナ容器にはいくつかの種類があるが、九州局では、植栽後の下刈回数の削減も念頭に置いて、マルチキャビティコンテナ(容量300CC)で育苗した苗木を使用している。



グラブによる枝条等のかき分け